2025年3月

# CWS JAPAN NEWSLETTER NO.102

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

## ミャンマー大地震 緊急支援を開始します

2025年3月28日12時50分ごろ（現地時間）、ミャンマー中部でマグニチュード7.7の強い地震が発生しました。震源はミャンマーで2番目に人口の多い古都マンダレーの近郊で、震源の深さは約10キロと比較的浅いところで発生したため、甚大な被害が出ています。その直後、南方でマグニチュード6.4の地震も続けて発生し、これらの地震はミャンマー全土および周辺国でも強く感じられました。

### ミャンマーの被害状況

まだ被害状況を収集しているところですが、3月31日現在で、1,700人以上の犠牲者が確認されています。さらに2,200人以上が負傷し、約200人がいまだに行方不明となっており、捜索・救助活動が続けられています。犠牲者の大半はマンダレー地域で報告されています。

被害はマンダレー、マグウェ、ネピドー、サガイン地域の病院に多数の負傷者が運び込まれ、医療施設は対応に苦慮しています。マンダレー国際空港、主要な橋、道路、大学、ホテル、歴史的・宗教的建造物、公共サービス施設など重要なインフラが広範囲にわたって損壊しました。何千人もの人々が家屋の倒壊や余震への恐れから夜間を屋外で過ごしています。

南シャン州では、カロー、ホポン、シーシェン、ラングコー、ロクソー、ニャウンシュウェ、ピンラウン、タウンジーなど複数の都市

が被災し、少なくとも51人が死亡、70人以上が負傷、1,200棟以上の家屋、3校の学校、1軒のホテル、複数の宗教施設が損壊または倒壊しています。

現場では、通信・インターネットの障害が人道的コミュニケーションや活動を妨げ、道路の損壊や瓦礫が人道的アクセスとニーズ評価を複雑にしています。また、医療施設の広範な損壊と医療物資（トラウマキット、血液バッグ、麻酔薬、補助器具、必須医薬品など）の深刻な不足が対応活動を妨げています。

被害の甚大さに鑑み、ミャンマー国家行政評議会（SAC）はバゴー地域、マンダレー地域、ネピドー連邦直轄地、サガイン地域、シャン州の一部に非常事態を宣言し、国際社会に対して支援の必要性を訴えています。日本政府を含む各国、国連機関も要望に応えて支援をすることを表明しています。国連緊急援助調整官は、緊急対応活動を支援するために中央緊急対応基金（CERF）から500万米ドルの初期資金を割り当てました。

## CWS Japanも緊急支援を開始します

CWS Japanは、すでに現場に入っているアジア防災・災害救援ネットワーク(ADRRN)のメンバー等を通じた支援を行うために、情報収集と関係者との調整を積極的に進めています。マンダレーにいるチームの無事も確認し、現場では被害の調査及び緊急支援が展開されています。関連団体の医療チームも被災地域入りしました。

こうした現場の支援をADRRNの理事長を務めるCWS Japanとしては積極的に調整・支援してまいります。皆さまのご理解・ご支援を何卒よろしくお願いいたします。

2025年4月1日 現地の様子（Photo：MERCY Malaysia）

## 皆さまからの温かい支援をお願いいたします

**継続的な寄付**

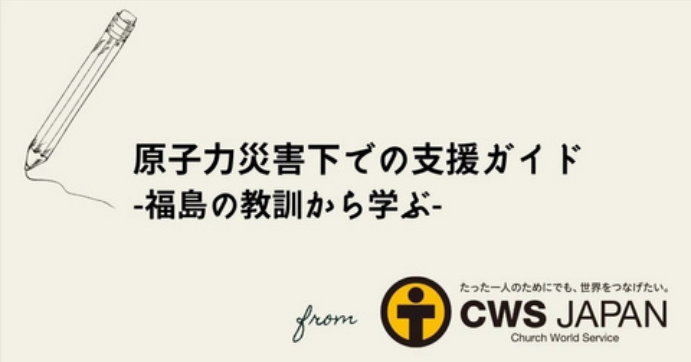
**今回のみ寄付**

本件についてご寄付いただけます際には「ミャンマー大地震緊急支援」とご記載いただけますと助かります。

ご寄付の一部（10%）は、管理費にも使われます。詳細な会計報告は、団体の年次報告書および財務報告書をご参照ください。

## ミャンマー大地震の最新情報についてはこちら

# 原子力災害下での支援ガイド
## 福島の教訓から学ぶ




こんにちは。事務局長の小美野です。2011年3月11日の東日本大震災と続く福島第一原子力発電所の事故から14年が経過しました。支援のために、当時住んでいたタイから日本にきた時を昨日のことのように覚えています。福島第一原発事故によって、いまだに多くの方が避難生活を余儀なくされており、廃炉の見通しは厳しく、福島の原発災害はまだ終わっていません。

### 『原子力災害下における人道支援ガイド』の作成

わたしたちCWS Japanは『原子力災害下における人道支援ガイド』（ジャパン・プラットフォーム事業）の作成に参画しました。このガイドは、日本および世界の支援団体/支援者が原子力災害発生時に、被災者の尊厳と権利を守りながら安全に支援活動を行うための知見をまとめたものです。3月に仙台で開催されたWorld Bosai Forumや仙台防災未来フォーラムにて本ガイドのコンテンツの周知を行いました。

今回はその中から、支援団体やボランティアの皆さんに知っておいていただきたい重要なポイントをいくつか抽出して紹介します。

### 原子力災害の特殊性

通常の自然災害と比較して、原子力災害には独特の難しさがあります。放射線は目に見えず五感では感知できないため、どこが危険でどこが安全なのかを判断することが極めて困難です。さらに、放射性物質は風向きや気象条件によって広範囲に拡散するため、被害のエリアが予測しづらく時間とともに変化します。

こうした不確実性は避難の長期化をもたらし、場合によっては永続的な避難を余儀なくされることもあります。また、初期段階では情報が錯綜し、何を信じればよいのか判断できない状況に多くの人が置かれます。そして何より、目に見えない放射線による健康影響への不安は、被災者の心理的な負担となって長く続きます。

福島の事例では、こうした特殊性から多くのNPO/NGOが支援活動に躊躇しました。被災3県での支援団体の活動地のうち福島県はわずか17%にとどまり、災害ボランティアも宮城県の49万4千人、岩手県の32万人に対し、福島県はわずか14万4千人と大きな差が生じました。放射線への恐れが支援の格差を生み出したのです。

### 支援者・ボランティアの安全確保

原子力災害下での支援活動において最も重要なのは、支援者自身の安全確保です。被災者を助けるためには、まず支援者自身が被ばくを防ぎ、健康を守らなければなりません。

支援活動に入る前に、放射線に関する基礎知識を身につけることが不可欠です。外部被ばくと内部被ばくの違い、放射線量の単位と基準値、年間被ばく線量限度（一般公衆は1mSv/年）などの知識は、リスクを適切に評価するための基礎となります。

また、必要な機材の準備も欠かせません。空間放射線測定器や個人線量計は、目に見えない放射線の存在を可視化するための重要なツールです。防護用品としてのマスクや防護服、手袋なども必要に応じて用意します。汚染の拡大を防ぐため、着替えや清掃道具も重要な装備です。

### 避難支援のポイント

原子力災害時の避難支援は、通常の災害とは異なる複雑さを持ちます。放射性物質の拡散は風向きや気象条件に左右されるため、避難の原則は「できるだけ早く、遠くへ、風下を避ける」ことです。

放射性プルーム（放射能雲）の流れを考慮した避難経路の選択が必要であり、避難指示区域が段階的に広がる可能性も考慮しなければなりません。

福島の経験からわかったのは、避難者の区分による支援格差の問題です。強制避難者（避難指示区域内からの避難者）と自主的避難者（区域外からの避難者）では、受けられる支援や補償に大きな差がありました。この不公平感は被災者間の分断を生み、心理的な負担を増大させました。支援に携わるわたしたちは、こうした制度的な格差を認識しつつも、すべての避難者に寄り添い、必要な支援を提供する姿勢が求められます。

特に医療機関や福祉施設の利用者、高齢者、障害者、外国人など、避難の際に特別な配慮が必要な人々への支援は優先的に行われるべきです。福島では入院患者の避難が遅れ、多くの人が「災害関連死」で亡くなりました。このような悲劇を繰り返さないためにも、脆弱な立場にある人々のための広域避難計画と移送手段の確保が不可欠です。

## 次の災害に備えて

ガイドには、上記に加え、情報のトリセツ、避難所運営、コミュニティへの支援のポイントや、いまだに日本でも課題になっている事項が含まれています。

世界には現在595基の原子炉があり、その数は特に新興国やグローバルサウスと呼ばれる国々で増加しています。また、気候変動対策として原子力発電の活用が再評価される傾向にある一方で、ウクライナ紛争におけるザポリージャ原発の危機など、原子力施設を対象とした軍事的脅威も現実のものとなっています。

大規模な原子力災害が生じるリスクはこれまでになく高まっているといえるでしょう。わたしたちは福島の経験から得た教訓を活かし、もしもの事態に備えて準備を進める必要があります。支援団体やボランティアの皆さんには、平時から原子力災害に関する知識を身につけ、安全に支援活動が行えるよう備えていただきたいと思います。

福島の経験が教えてくれたのは、原子力災害では情報の透明性と信頼関係の構築が何よりも重要だということです。政府や事業者からの一方的な情報発信ではなく、被災者自身が参加する情報収集と発信、そして支援者と被災者の対等な関係構築が、効果的な支援の基盤となります。

『原子力災害下における人道支援ガイド』は6月に正式発行予定ですが、次の災害に備える一助となれば幸いです。被災者の命と尊厳を守るために、ともに学び、ともに備えていきましょう。

文：小美野剛（事務局長）

# 日本語教育の可能性
## 出張レッスンを通して見えたこと

新宿区・大久保エリアで展開するコミュニティカフェ@大久保では、2023年のオープン当初から、移民・難民のための日本語教室を開催してきました。今回は、外国人オーナーの店に赴き、移住労働者に対して「日本語出張レッスン」を実施してくださっている日本語指導者の梅田華奈さん（早稲田大学所属）に、日本語指導を通して見えてきたことについて寄稿いただきました。

▼日本語学習支援の経緯・概要については、過去のnote記事もぜひご覧ください。

出張レッスンにて、日本語教師をしている梅田です。わたしが出張レッスンに日本語教師として参加し、約1年が経ちました。普段は日本語教育分野の大学院生をしています。このnote記事では、学生でもあり新人日本語教師でもあるわたしが出張レッスンから学んだことを、個人の視点から書かせていただきます。

### 出張レッスンを通しての気づき

出張レッスンに参加したきっかけは、2023年の夏に足を運んだコミュニティカフェでした。当時のわたしは、地域に根差した日本語学習支援や多文化共生イベントに関われる場を探していました。

コミュニティカフェでCWS Japanの職員に出会い、そのまま出張レッスンをしている飲食店にも案内してもらいました。店内は、言葉も、モノも、文字情報も、その国・文化のもので溢れていて、まるで違う国を訪れたような感覚になったのを覚えています。

そこには、その国のみなさんの濃いネットワークとコミュニティがありました。

出張レッスンの日本語教師としてその店に通うようになり、見えてきたのは「日本語との接点の少なさ」です。学習者やお店のみなさんは、出身国のネットワークが常に側にあり、仕事も人間関係も出身国のコミュニティで完結しているのだと話してくれました。そんな彼ら/彼女らにとっての「いつもの安心できる空間」が、わたしたち日本語教師が訪れることによって、週に数時間だけ「日本語を使う場所」に変化する。ここに出張レッスンの大きな意味があるように思います。

また、お店という開かれた場所でレッスンをすることで、教科書を使って勉強する学習者に加えて、お店のスタッフやお客さんにも日本語と触れる機会が生まれていました。例えば、毎週顔を合わせてきたスタッフの方は「あなたくる、日本語、ちょっとちょっと」とよく言います。この言葉は、その時の身振りと表情も合わせて、「あなたが来るから、わたしも日本語をちょっとずつ使うようになった/ちょっと覚えた」という意味で伝わってきました。日本語との接点が少ないライフスタイルを持つ彼ら/彼女らが日本語と関わるきっかけを提案するのも、この出張レッスンにできることの一つだと捉えています。そしてこのきっかけが、日本での生活において何か困りごとに直面した際、または有事の際に、近隣住民や近くにいた人との対話を試みる気持ちにつながることを期待しています。

飲食店でのレッスンの様子　©CWS Japan

レッスンとレッスンの間の時間で食べた
ネパール料理「モモ」©CWS Japan

## 日本語教育の可能性

CWS Japanでは、防災や多文化共生、社会福祉などの多岐にわたる分野の方と関わる機会があります。日本語教育はたくさんある支援のうちの一つだという認識が強まり、「言語を教えることは何につながるのか？」と自分たちの専門性を見つめ直すチャンスをもらいました。そうして浮かんだ「日本語学習がコミュニティに対してできることは何か？」という問いが、大学院での研究の重要な軸にもなりました。春からは南米の学校で引き続き日本語を教える予定です。CWSでの出張レッスンの経験が次のキャリアに繋がったと感じています。

学習者の日本語能力を支えるというコアの部分に加え、一歩俯瞰（ふかん）した視点で日本語教育を捉えられるようになったことは、駆け出しの日本語教師であるわたしにとって大きな財産です。

この先も出張レッスンが学習者とコミュニティのみなさんにとって「日本語のきっかけ」となることを、そしてこのきっかけから彼ら/彼女らの世界がさらに広がることを願っています。

（文：日本語指導者・早稲田大学
梅田華奈）

# さまざまなSNSで情報をお届けしています

CWS Japanでは各種SNSで、日ごろから情報をお届けしています。お好きな方法で最新情報をぜひチェックしてみてください

各種SNSは
ここをクリックor
QRコード読み込み

# 日本語学習ケーススタディと、ミャンマーカフェを開催 3月のコミュニティ・カフェ@大久保

皆さん、こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です。今月もコミュニティ・カフェ@大久保ではケーススタディや、ミャンマーカフェなどさまざまな催しを行いました！そんな今年度ラストのコミュニティ・カフェ@大久保のレポート記事をお届けします。

## 日本語学習ケーススタディ続編

3月5日(水)のカフェでは、昨秋に開催したウィークエンドカフェにお越しいただいた地域日本語教育がご専門の和田貴子さんを再びお招きして、前回の続編として「難民等生活者のライフステージと日本語学習ケーススタディ2」を開催しました！

▼前回の様子はこちらからご覧いただけます

今回はコミュカフェが1年近く日本語学習支援を行ってきた難民申請者のリアルなケースを取り上げ、グループワークも交えながら参加者とディスカッションしました。

難民申請者への日本語学習支援は語学指導だけにとどまらず、生活面やメンタル面におけるサポートも同時に行いながら、より包括的な支援が必要です。そのため、一人の日本語指導者ではカバーしきれません。

そこでコミュカフェでは各学習者の生活ニーズや日本語能力レベルに合わせて教材・手法を選定し、また媒介語も活用しながら、カスタマイズされたプライベートレッスンを行い、チームで学習者を支えています。

日本語は学習者にとって、サバイバルツールであり、セーフティネットになります。学習者が日本の地域社会に融合できるよう、人財として認められることを目指し、日本語学習を急がせることよりも、日本語学習の定着率向上を目指し、支援者も根気強く伴走支援を続けています。

来年度も再び、和田さんを囲んで、地域日本語教室の学習者定着をテーマに参加者の皆さんと学び合いたいと考えていますので、その際はぜひご参加下さい！

## 国境の最新報告をお伝えしたミャンマーカフェ

3月19日(水)のカフェでは、タイ・ミャンマー国境の町メーソットを訪れたユースたちによる報告会として、「ミャンマーカフェ🇲🇲〜国境の町タイ・メーソットからの最新報告〜『ミャンマー避難者の現実を知る』」を開催しました！

今回のミャンマーカフェでは、わたし・五十嵐を含めて、ともに登壇したユースが参加したマイノリティ宣教センター主催のプログラム「マイノリティ・ユース・フォーラムin Mae Sot」での訪問を通して見聞きしたことを中心に報告しました。

メーソットはタイに位置していますが、国境に接する町ということでミャンマー出身者も多く暮らしており、また2021年にミャンマーで発生した軍事クーデター以降も、迫害から逃れて国境を越えてタイへと渡って暮らしを続けている方が多くいます。今回メーソットを訪れたユースたちは子どもたちが通う移民学校や民間のクリニック、現地のジャーナリストの支援活動を行っている拠点などを訪れて、そこに生きる人々と出会い、交流を深めました。

（マイノリティ宣教センターのFacebookやInstagramでは、メーソットを訪れた様子も投稿されていますので、そちらもぜひ合わせてご覧下さい。）

ミャンマーカフェで共に報告したユースフォーラムの参加者たち©マイノリティ宣教センター

メーソットではタイ語よりもむしろミャンマー(ビルマ)語やこの地域に多く暮らす少数民族のカレン語が飛び交うことから、わたしたちとの間でもさまざまな言語のハードルがありました。しかし、そのようなバウンダリー(境界線)も越えて、そこで生きる子どもたちや、参加したユースと同世代の若者たち、そしてその子どもや若者たちの成長と将来を少しでもより良くするために懸命に支える大人たちの姿などを見聞きすることができました。

そして、後半では先日ミャンマーからメーソットへと逃げてきたばかりの仲間にインタビューした動画を流し、実際にミャンマーから逃れてきた人たちの道のりや暮らしについて知っていただく機会となりました。

カフェのある大久保や近くの高田馬場では「リトル・ヤンゴン」とも呼ばれるほど、ミャンマーのお店やミャンマーの方も多く集う地域となっています。今回のカフェではそれに負けじとミャンマーのお菓子やお茶に加えて、日本語学習の支援を受けているミャンマー出身の方が手作りしてくださったヌードル(ナンヂードゥッ)も来場者に振る舞い、ミャンマー色盛りだくさんの会となりました。

登壇者は現地で購入した民族衣装を身にまとってお話ししました！©マイノリティ宣教センター

当日は3月下旬にも関わらず朝には降雪もあり、肌寒い気候かつお足元も悪い中ではありましたが、来場者の皆さんからもたくさん質問をいただき、今のミャンマーや国境地帯の状況について高い関心が寄せられました。

これからもミャンマーに関わる方たちとの繋がりを持ち続けながら、このような機会を提供していけたらと思います。

## 4月のカフェ企画のお知らせ

4月のカフェは、通常通り、第1・3水曜日(2日、16日)の営業です。

2日(水)のカフェでは東アフリカの国タンザニアをテーマに、16日(水)はインドの南に位置するスリランカの料理教室を行います！

4月からは新年度となりますが、引き続きコミュニティ・カフェ@大久保にぜひお立ち寄りください。

コミュニティ・カフェ@大久保の各種SNSはこちら。
Facebook / Instagram / X(旧Twitter)

# コミュニティ・カフェ@大久保 オープンから2年を振り返って

皆さん、こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です。月に2回、東京・大久保にある日本福音ルーテル東京教会の1階スペースにて営業しているコミュニティ・カフェ@大久保も、今年の4月でオープンから2周年を迎えます。そこで、今回はこの2年間で開催してきた取り組みやイベントなどを、カフェ事業担当の牧と、わたし・五十嵐がそれぞれ振り返り、印象に残っていることを挙げながら、今後取り組んでいきたいことについてお話していこうと思います！

**コミュニティ・カフェ@大久保とは？**

コミュニティ・カフェ@大久保は、毎月第1・第3水曜日の13:00-17:00に、日本福音ルーテル東京教会でオープンしている、誰でもふらっと立ち寄れるコミュニティカフェです。

2023年4月に多様なヒト・文化が集まる新宿区の大久保にて、さまざまな人々が出会い、交流し、繋がることができる地域の憩いの場として、オープンしました。

この地域に集まる多様な人々と普段から知り合えるような多文化・多世代交流の居場所として、ドリンクやパンを提供するだけでなく、料理・クラフト・音楽・アートなどさまざまな体験型イベントの他、多文化共生をテーマにした学び合いのワークショップを開催しています。

コミュニティ・カフェ@大久保：Facebook / Instagram / X（旧Twitter）

▼1周年記念の特集記事はこちらからご覧いただけます。

## 2年間で実施した企画

2023年4月からオープンしたコミュニティ・カフェ@大久保では、カフェの営業日にさまざまな催しを行ってきました！
人気企画の各国の料理教室をはじめ、演奏会や歌声カフェ、映像作品の上映会、防災、多文化共生、日本語学習、福祉などをテーマにゲストと参加者間で意見交換を行うケーススタディなど、多種多様なイベントを開催してきましたが、この2年間で開催してきた企画はなんと合計で51回にも及びます…！！(2023年度：21回＋2024年度：30回)

| 日付 | イベントタイトル |
|---|---|
| 4/5 | 写真展「コロナ禍の中の大久保」 |
| 4/19 | ミニライブ（ギター・沖縄民謡） |
| 5/16 | ワールド・バザール |
| 5/17 | ボリビア料理教室 |
| 6/7 | ミニライブ（ジャズバンド） |
| 6/21 | 「大久保を撮る・知る」写真ワークショップ |
| 7/5 | 日本の七夕を知ろう！ |
| 7/19 | イランの料理とお茶教室 |
| 8/16 | 関東大震災から100年ービデオ上映から考える多文化共生ー |
| 9/6 | 天使の落書きワークショップ |
| 9/20 | 福祉の専門家に聞いてみよう！ー多様な人々とのコミュニケーション・関わり方ー |
| 10/9 | 大久保祭り「ワールド・バザール」 |
| 10/18 | 国際交流カフェwith留学生 |
| 11/1 | 英語で学ぶスパイスづかい：サイラスさんとビリヤニを作ろう！ |
| 11/15 | 多文化共生×防災まち歩き@大久保 |
| 12/6 | クラウディオさんと作るクリスマスリース（中止）、フィリピンのフェアトレード商品販売 |
| 12/20 | クリスマス・ピアノコンサート |
| 1/17 | スリランカ人講師によるカレー料理教室 |
| 2/7 | 午後の歌声カフェ |
| 2/21 | 福祉カフェ |
| 3/6 | セイロンティーとお菓子教室 |

2023年度(2023/4〜2024/3)の企画一覧

| 日付 | イベントタイトル |
|---|---|
| 4/3 | ネパールぎょうざモモ教室 |
| 4/17 | 癒しのクラフトカフェ：新聞からできるエコバッグ |
| 5/1 | 福祉カフェ：外国人高齢者と防災～私たちが今できること～ |
| 5/18 | 五月まつり |
| 6/5 | 午後の歌声カフェ |
| 6/19 | 大久保多文化共生防災まち歩き、防災×日本語教育とは？（夜カフェ） |
| 7/3 | カンボジアン・カフェ |
| 7/17 | 涼風マイうちわ作り |
| 7/24 | 生活者のための地域日本語教室ケーススタディ |
| 8/7 | 夏を感じる！水彩画のポストカードづくり |
| 8/21 | らくごカフェ、在日外国人のメンタルヘルス・ケーススタディ（夜カフェ） |
| 9/4 | タイ・チーカフェ |
| 9/18 | 都市型災害と外国人ー過去からの教訓、そして今わたしたちにできることー、多文化共生×地域防災ケーススタディ（夜カフェ） |
| 10/2 | 「今昔物語」上映会 |
| 10/6 | 映画「牛久」上映会&トークイベント |
| 10/14 | 大久保まつり「ワールド・バザール」 |
| 10/19 | 難民等生活者のライフステージと日本語学習ケーススタディ |
| 11/6 | 大久保多文化共生防災まち歩き |
| 11/20 | おはなしと遊びの日本文化体験 |
| 12/4 | これもチャイ？あれもチャイ？ |
| 12/18 | クリスマス歌声カフェ |
| 1/15 | 生地から作るチャパティ教室 |
| 1/29 | 新大久保商店街振興組合「インターナショナル事業者交流会」ケーススタディ |
| 2/2 | そばがきでネパールカレーを味わう@大久保地域センター |
| 2/19 | 大人のためのウクレレと絵本のおはなし会 |
| 3/5 | 難民等生活者のライフステージと日本語学習ケーススタディ２ |
| 3/19 | ミャンマーカフェ～国境の町タイ・メーソットからの最新報告～ |

2024年度(2024/4～2025/3)の企画一覧

## 始まりを振り返る|仮称でスタートしたコミュニティ・カフェ

**牧：**

思い返せば2年前、CWS Japanの事務所がある地域で「支援拠点が欲しい」と思ったのがきっかけで、コミュニティ・カフェ@大久保を始めることになりました。なぜなら、災害が発生した時に地域に支援拠点があることや一緒に動いてくれる仲間がいるかどうかによって、支援活動の開始時期が早くもなり、遅れることにもなるからです。また、拠点があれば、平時から人と情報が集まりますし、何よりも地域との連携協力体制を築くためには、平時から拠点を中心とした協働の実績づくりが必要です。首都直下型地震が予測されてから久しいですが、いつどこで発生するか分からない大規模災害への最大の備えは平時からの地域との連携力だと考えています。

実は「コミュニティ・カフェ@大久保」という名前は仮称でした。CWS JapanがブリヂストンBSmile募金という資金的援助があったために、想いをカタチにしてスタートを切ることができました。CWS Japanが運営しているカフェとして認知されるよりも、ずっと地域に残るルーテル教会が地域の居場所として運営できるよう、そのバックアップを行うという、将来的には役割の逆転を願っており、その時まで仮の名前で続けようと、今に至っています。

## 参加者の変化｜多世代交流の場へ

**五十嵐：**

わたしは2024年4月からCWS Japanに入職したので、コミュニティ・カフェ@大久保に関わり始めてからはちょうど一年が経ちます。全体的な印象としてカフェが開催するイベントでは本当にさまざまな方に参加していただいているなと思います。年代をとっても、若者からお年寄りの方まで幅広く、カフェの場づくりはまさに多世代交流の場になっています。

また、今年度はカフェの取り組みに関心のある中高生や大学生といった若い世代の方もほぼ毎回参加してくれていました。特に、卒論の研究や最近の中学校・高校で行われている「探求学習」の課題のために、自分の興味・関心を持つテーマとして「多文化共生」・「防災」・「地域コミュニティ」のキーワードをもとにカフェにたどり着いた学生もいます。インタビューやフィールドワーク調査のために何人も訪れてくれました。学生やユースが中心となって企画することもあれば、お年寄りの方向けに準備することもありますが、結果としてどの企画にもいろいろな方に関心を持って来てくださっているというのは嬉しいことだなと思います！

## 印象的だった出来事｜多様な仲間に支えられて

**牧：**

この2年間で50回以上ものイベントを企画してきた中で、集客もハラハラしながら準備してきましたが、それと同時に外国ルーツの仲間たちを講師として企画したイベントは講師自身が当日無事に現れるかも毎回ドキドキでした。それは、コミュカフェにつながる外国ルーツの人たちの多くは、不安定な身分や生活を強いられ、心も身体も傷ついた人たちだからです。実際に一度だけ、ゲストの体調不良により、直前にキャンセルせざるを得なかったイベントもありました。
そんなドタキャンが発生した時に手を差し伸べてくれたのが、日本人ボランティアでした。ゲストの欠席により急遽プログラムを変更し、代替企画としてボランティアの助けを借りて実施することができました。さらには、地元の大学生が別の企画も持ち込んでくれたので、カフェスペースは想定外ながら和やかで賑やかな時間を過ごすことができ、

ピンチをチャンスに変える経験をしました。コミュカフェはこれまでに地域の学生たちや企業ボランティア、地域住民、シニア層にいたるまで幅広い年代・属性のボランティアによって支えられ、続いています。

ゲスト講師の欠席で中止せざるを得なかった企画をボランティアのサポートにより、
代わりに実施することができました。©CWS Japan

**五十嵐：**
今年度はケーススタディやイベントなどで、「防災」や「多文化共生」といった普段取り組んでいるテーマに対して、さらに「福祉」や「難民支援」といった観点で企画を開催できたことも良かったなと思います。福祉の観点だと、わたしが去年取得した社会福祉士の国家資格を活かして、東京社会福祉士会や地域の新宿区社会福祉士会の皆さんにも呼びかけて「在日外国人のメンタルヘルス・ケーススタディ」開催しました。多くの福祉関係者が来てくださり、当日は時間が足りないほど、有意義な意見交換の場にすることができました。また、わたし自身も今年度は精神保健福祉士の資格取得を目指してメンタルヘルスの分野を勉強している最中だったので、このケーススタディではさまざまな実践のケースを聞くこともできて、とても貴重な機会でした。

また、10月6日に開催したドキュメンタリー作品の『牛久』の上映会＆トークイベントでは、個人的にも感慨深い経験がありました。というのも、わたしが学生時代にこの作品が劇場で上映していたのを観に行ってから、日本に暮らす難民・移民の課題により能動的に関わらなければと考えるようになったきっかけでもあり、その流れで難民支援をしている

CWS Japanで働くことを希望した経緯がありました。

この作品の上映会とトークイベントをコミュニティカフェの場で開催ができたことは、個人としてもわたしが以前から抱いてきた日本に暮らす難民・移民とされる方のために力になりたいという想いを実際に一つ形にすることができたのではと感じる機会にもなりました。

**今後の課題・取り組んでいきたいこと**

**牧：**
これまでわたしたちはカフェの場作りを「多文化」でスタートし、のちに「多世代」が加わりましたが、これからは「多様性」をキーワードにしていきます。特に、人々の寛容さが失われ、排除に向かいつつある昨今の風潮を変えることを目指して「多様性カフェ」として、バージョンアップを図ります。

また、これまで「宗教施設は信徒のもの」と周囲から認識されていると思っていましたが、昨年放映された『出没！アド街ック天国』というテレビ番組で特集された新大久保のランキングの中で、カフェの会場である日本福音ルーテル東京教会が5位にランクインした時は驚かされました。100年以上同じ地で宣教活動を続けてきた歴史の長い教会が「地域のもの」になったことを知った瞬間でした！もう教会の高い敷居は取っ払われたのだと思います。

**五十嵐：**
わたしがカフェでこれからやってみたいことの一つは、メンタルヘルス分野を視野に入れた場づくりの企画です。今年の4月からは、社会福祉士に加えて、精神保健福祉士の資格所持者としての働きも行えるようになるので、メンタルヘルスに関わる支援者とのネットワークづくりも広げていきたいと思っています。
教会というスペースが地域で暮らしに困難を抱えている人が気兼ねなく「助けて」と言えるような場であるために、福祉的な支援にもつながれるよう日ごろから準備していていきたいです。また、歴史的に特にキリスト教会が自助グループの活動などでサポートしてきたアディクション（依存症）をはじめ、精神障害を持つ方などメンタル面でのサポートやケアを必要とする人たちに対しても居場所となれるように、あらゆる人が孤立せずにつながれる場として機能するよう取り組んでいきたいと思います。そのためには、よりさまざまな方にもコミュニティ・カフェの取り組みに参加していただけるように、今までやってみたことのない企画についても積極的にチャレンジしていければと思います！
3年目を迎えるコミュニティ・カフェ@大久保の活動も、引き続きぜひご注目ください！

## 居場所を失った人への緊急活動応援助成

本事業は赤い羽根共同募金「居場所を失った人への緊急活動応援助成」の助成金による支えと、文科省「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育の委託事業として運営されています。

引き続きみなさまからの温かいご支援をお願いいたします。

（文：プロジェクト・オフィサー五十嵐望美＆ディレクター牧由希子）

**皆さまのご理解・ご支援を心よりお願い申し上げます。**

**継続的な寄付**

**今回のみ寄付**

**特定非営利活動法人CWS Japan**
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

**メールアドレス：**
public@cwsjapan.jp
**電話：**
03-6457-6840

CWSJapan
@Japan_CWS
cws_japan